ことば
言葉
コトバ

“寝図美”という名の猫の「字解き」

仕事柄，漢字について放送現場から問い合わせを受ける。電話で聞かれるため，やりとりにはしばしば「字解き」を要する。例えば「『超える』と『越える』のどちらがよいか？」と聞かれたときは，「超」は「チョウ」，「越」は「エツ」などと音読みを交え，混乱しないように伝える。「『冬季』か『冬期』か？」であれば，「『季節』の季」「『期間』の期」などと熟語を使う。ポイントは，相手が他の字と取り違えないよう，明確に字をイメージできる言い方をすることである。

「高」と「髙」，「崎」と「﨑」など，字体の異なる字の区別が必要な場合は，このやり方が通用しない。その代わり，例えば「髙」には「はしごダカ」（鍋ぶたの下が「はしご」のような形），「﨑」には「たつザキ」（つくりの上部が「立」）などという便利な呼び方がある。字の一部分にフォーカスして漢字のイメージを喚起する。うまい言い方があるものだ。

新聞社には，これら字解きを一覧表にしているところもある。『朝日新聞の用語の手引［新版］』の「読み合わせの字解き例」を見ると，「畑」は「火へんのハタケ」，「畠」は「しろたのハタケ」となっている。「介」は「かいスケ」，「助」は「じょスケ」。「肇」は「ハナ肇のハジメ」と呼ぶそうだ。簡にして要を得た説明。活字を取り違えることが許されないプロたちが，間違いなく字をイメージできるように編み出した，汗と涙の結晶と言える。

ミュージシャンの細野晴臣さんは，その昔“寝図美（ねずみ）”という名の猫を飼っていた。もともとは音楽仲間の遠藤賢司さんの愛猫だったが，それを預かることになり，その名前のまま飼い続けたそうだ。その遠藤さんが去年他界し，細野さんは旧友をしのんで，この猫にちなんだ歌をコンサートで歌った。遠藤さんが猫を連れて海に行ったときのことを歌った『寝図美よこれが太平洋だ』（作詞・作曲 遠藤賢司）という曲である。

歌う前に細野さんは，寝図美の名前を，「『寝る』に，ズウタイの図…」と説明した。観客が「鼠（ねずみ）」と取り違えないための字解きである。それを聞いた私は，「ん？ ズウタイの図？ …『図』の字なら『図面』や『図書館』のほうがイメージしやすいのでは？」と，これも仕事柄か，気になってしまった。

しかし，よく考えるとこの字解きは，「寝ている図体（ずうたい）が美しい」という，「文」になっているのだ。名前のことを何度も聞かれるうちに，細野さんは，漢字と同時に猫のなりや姿も一緒にイメージできるこの字解きにたどり着いたのではないか。

遠藤さんも寝図美も，もうこの世にはいない。しかし字解きのおかげで，歌の中に，美しくしなやかな脚で海辺に遊ぶ猫の姿が浮かび上がる。しゃれた猫の名前を歌に残した若き日の遠藤さんの姿も，その横に浮かぶ。

井上裕之（いのうえ ひろゆき）